

---

# 『結婚』

大輔華子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『結婚』

### 【Nコード】

N4693S

### 【作者名】

大輔華子

### 【あらすじ】

今年三十歳になる玲華は、体の不自由な母との生活を考え結婚を意識し始める。ところが『華子』という女性との奇妙な出会いから、その後、話は予想もつかない方向へと展開していく。

基本に流れているものは、恋愛小説だと思えます。でも、ホラーもハチャメチャコメディもシリアスも全部混ぜています。

この作品は、ごはんライス先生の課題に対応しての投稿です。

テーマは『結婚』。

制約条件は、テーマの結婚とバッドエンド。  
そしてバッドエンドであっても、どこか人の心に温もりを与える  
もの。

制約条件がきつすぎて、枚数はまた超過してしまいました。

【華】

## 玲華（レイカ）

松玲華は東京駅で母の妹である叔母の登志子と待ち合わせをしていた。まつれいか玲華は今年でいよいよ三十歳になる。病気がちな母と二人の家庭で育ったこともあり二十歳を過ぎる頃から家事を半分以上担っていたので、この年になるまでほとんど男性と付き合った経験はなく、いまだ独身である。

待ち合わせ場所の『銀の鈴』は、わざわざ『待ち合わせ場所』と書いてあるほど人と人の待ち合わせに使われることが多く、その日も多くの人で混みあっていた。

とんでんしゃん。よーっ。玲華の携帯のメールの着信音である。

「玲華ちゃん。今どこ？ 私は八重洲中央口から出てちよつと迷っています。」

玲華は早速返信した。

「ここよ。ここ。もう着いてる。」

「……………」

玲華は相変わらずの天然である。彼女が婚期を逃しているのはあながち家庭のせいだけでもなさそうだ。

暫くしても登志子が待ち合わせ場所に来ないので、玲華は痺れを切らし電話をかけた。

「叔母さん。私ここにいるって言うてるじゃない。早く来て」

「こここつて、わからないわよ。銀の鈴にいるのよ。あなた目いんだから見つけて頂戴」

「逆よ逆。叔母さんこそ老眼でしょ。遠くはよく見えるでしょ。」

「まったく。あんたって人は相変わらずね」

二人は身を乗り出し人混みの中からお互いを捜す。登志子がふと気がつくと人一倍顔を乗り出している女性が隣にいた。玲華だ。隣にいたのでは、いくら目を凝らしてもお互いに見つかるはずがない。

登志子の話は玲華のお見合い話だった。玲華は特に今すぐ結婚したいというわけでもなかったが、俗に言われる三十路という言葉の響きは女性にとってセクハラ紛いに聞こえるもので、良い人であったなら結婚を考えようと思いたいその話を受けることにした。

## お見合い

三日後、お見合いは東京駅からすぐのところの聳え立つホテルのテールラウンジで行われた。お相手の男性は登志子の勤め先の部長さんの息子さんで、玲華より四歳年下の長身のいわゆるイケメンだった。名前は石原信之といった。最近まで警察官（巡査部長）として地方の警察署に勤務していたが、この四月、県警本部の刑事課一係の刑事として異動になり、来週から新任地に勤務する予定だという。

簡単な自己紹介も済み、登志子をまじえて当たり障りのない世間話をしたあと、登志子は席を外して先に帰った。二人だけになると、信之は玲華を丸ビルの夜景の美しいレストランに誘った。二人になった途端に信之は急に玲華に対してタメ口になった。

「僕は警察関係者だからね。人が多くて目立つところはなるべく避けるんだよね」

二人の席はレストランのフロアで最も見晴らしの良い大きなウィンドウの真ん前である。どう考えてもこれ以上目立つ場所は他になさそうだ。

「刑事さんなんですか。何だか男らしいですね」

「いやあ。刑事はこれからだからね。実はね、一係はいわゆる殺人事件担当だね。もう赴任前から事件の資料をおさらいしてこい、って言われているんだよ。何だか昼も夜もなく忙しくなりそうで、あなたには本当に悪いと思ってしまっただね」

「ぶっ」

「あの……。どうかした？」

あなたには悪いって……。何で、もう私が結婚するって決めつけてるわけ？

「いつ、いえ。何でもありません」

「今回初めて担当することになった殺人事件だけれどね。どんな事件か知りたいだろう」

そんなもの知りたくないよう。ましてや殺人事件だなんて。

「あら。どんな事件ですか？」

「犯人はもとは女詐欺師でね。色仕掛けで男を釣って金を借りてはドロロン、ていうやつでね。今回は金を借りた男を駅のホームから突きとばして転落させて殺しやがったんだよね」

「あら、まあ。怖いですわ」

「あつ、そうそう。その詐欺師の殺人女。あなたと同じ三十歳なんだよね。詐欺容疑で手配されてたから手配写真があるはずだけど、男に大金出させる殺人女の顔ってのはどんな顔してるんだらうね。うははは」

「……………」

何か上から目線で超ムカツク。デリカシーのかけらもない。喋らなければいい男なのになあ……。

泥棒！

お見合いも無事（？）終わると、玲華は逃げるように自宅マンションに戻りため息をついた。

だめだ。あいつと話していると息が詰まって酸素欠乏になる。男ってみんなあんなふうなのかなあ……。

玲華はわざわざ遠くから自分を気遣ってくれ紹介してくれた登志子には悪いと思っただが、丁重にお断りのメールを送信した。理由はよくありがちな、『自分には勿体ないような方で、ご立派すぎて付いていく自信がありません』という社交辞令付きで。

しかし、メールを送ったあと、母の体が弱いことなどを考えて心に少し迷いが出てきた。そうこうしている時、窓の外のベランダで洗濯物がひらひらと不自然に揺れるのに気が付いた。玲華のマンションは一階である。

泥棒？！

カーテンの隙間から明らかに人の姿が見える。玲華は緊張した。そして遠い昔福島に住んでいた頃、遠足で行った先の会津若松で買ったおもちゃの刀を持ってきた。刃渡り四十センチ。ただし、おもちゃだからふにゃふにゃのビニールに銀箔を貼り付けた代物である。泥棒は家に入ってくる様子はない。洗濯籠を手に持っていて、乾しているものうちどうやら下着などの衣類だけを取り込んでいるようだ。念の入ったことに、籠は泥棒本人の『マイ籠、持ち込み』である。三日間ほどためていたものをまとめて洗濯して乾していたので、最低でもブラとショーツ六セットを乾していたはずである。今回は特に一着一万円を超える高級ブランド品が含まれている。



あいつ。まさか全部持っていくんじゃないでしょうね。だって許さないからね！

恐れていた通り、その泥棒はタオル以外ほとんどの衣服を綺麗にたたんで『マイ籠』に入れてバルコニーを越えて行った。玲華は怖いのを通り越して頭にきて玄関からおもちゃの刀を持ったままとび出した。曲がり角のあたりに泥棒の姿が見える。

「カラー泥棒！」

泥棒は妙な格好をしている。上下肌色の厚手の下着に薄茶色の腹巻姿。頭に薄手の手拭いを被り鼻の下で結んでいる。手拭いに隠れていてよくわからないが、おそらく格好からして禿げ頭で、丸めがね。左手には黄色い洗濯籠、背中には泥棒定番の唐草模様の一反風呂敷を背負っている。足袋を履いていて、歩き方はいわゆる抜き足差し足というやつだ。

こっ、これは完璧なマニアだ。趣味の世界に入ってる……。

その姿に圧倒され、啞然としているうち、玲華は泥棒を見失ってしまった。近くに交番があるので、被害届けを出そうとして中にいた警察官に盗まれたものと泥棒の格好を説明した。警官は呆れた顔をしながら言った。

「あのねえ。奥さん。そんな変な格好をした泥棒はいないと思いますけど。それじゃあ、私は怪しい人です、って言ってるようなものですよ」

「いえ、本当です。ドリフのカトチャンスタイルというか。その……。ちよび髭もあつたかもしれません。あと、それから、私、奥さんじゃありません。まだおねえさんです！」

「ドリフの何ですって？」

若い警官なのでカトチャンスタイルを知らない。しかも『おねえ

さん』のくだりを完全に無視された。頭にきた玲華は持っていたおもちやの刀を構えた。

「あの。ここ警察ですから……。おもちやでも刀はやめたほうがいいです。逮捕されちゃいますよ。それから、奥さん。サンダルが逆ですし、夜中にジャージの上にスカート履いてうるうるしないほうがいいと思います。近所中の犬が吠えていますし……」

なつ、何ですって?! 失礼な。くう。悔しい……。やっぱり、『私の夫は刑事です』とか、『警察署長です』とか言ってみたい! ちよつとそこの警官! 頭が高いよ! とか。やっぱり信之さんと結婚しようかなあ。だいいち、泥棒は怖いし家の中に男性がいなくてというのは怖いよ。世の中物騒だからね。

玲華は被害届けを諦め、再びマンションに戻ってから改めて登志子へ『やっぱり信之さんと結婚を前提にお付き合いをしてみたいです』とメールした。

## イカサマ占い師

翌日の土曜日は普通の会社と同様に玲華の会社も公休だった。玲華はいつも休みの日の遅い朝食をマンション近くのファミレスのモーニングで済ませる。その日も朝十時ちょうどに店に入りトースト・スクランブルエッグセットを注文した。ウィンドウから見える空はよく晴れわたりとても気持ちの良い青空だ。

プレミアムカフェからアセロラのドリンクを持ってきて席に着いた途端、背中合わせの席に座っていた男が耳のうしろから話しかけてきた。

「……太ったな」

「……ん？」

玲華は突然の言葉にまさか自分のことではないと思ったが、あまりに声が近かったため、声の主が見えるよう念のためテーブルを挟んで反対側のシートに座り直した。するとその男は半身になって振り向くように玲華の方を見ていた。

白髪の老人だ。長い眉毛も真っ白、鼻の下の髭もあご髭も全部真っ白で、しわくちやの赤ら顔である。見たことがない男だ。

初対面の私に対して、いきなり失礼なやつ！

「華子。トーストは一枚にしておいた方がいいな」

あまり大きな声ではないが老人にしてはよく通る声だ。玲華は少し気分を害されて言葉を返した。

「あの。私、華子という名前ではありません。人違いしていませんか？」

「何を言っておる。おまえは伊東華子じゃ」

おっ、おまえ？ ですって？ ますます失礼なやつ！

「人違いです！ ぜんぜん違います！」玲華は立ち上がり、中腰になって言った。

老人はあご鬚をなでながら、しげしげと玲華を見た。

「ふうむ。尻がでかすぎるな。やっぱり違うかな。はは、冗談冗談。華子……」

「ちよつと！ さっきから失礼なことばかり！ あなた、いったいどこのどなた?!」

「そうだな。わしのことは知らんな。その先の商店街で占いをやるとる。しかしおまえのことはよく知つとるぞ」

「占い師？ 私、松玲華です。苗字も名前もぜんぜん当たってませんから！」

老人は、急に納得したように言った。

「おう、そうか、そうか。おまえはマツレイカじゃったか。そうじやなレイカ」

「……………」

ぶーっ！ ごまかしてる。完全なイカサマ占い師だ。しかも頭おかしい。もうかかわり合いになるのはよそう。

その後も自称占い師の老人はぶつぶつと独り言を呟いていたが、玲華は一切無視し黙々と食事をして先に席を立った。

少し買い物をしてマンションに戻ると、時刻は既に正午を回っていた。玲華は母に買ってきたコンビニ弁当をレンジで温め、自分はドリップ式のコーヒーを注いでテーブルに置いた。

母が心配そうな顔をして言った。

「お昼食べないの？」

「ええ！ 私、少し太ったみたいだから」

「……………」

「ねえ。お母さん。私、今日、誰かに似てるって間違えられたんだけど、私に双子の姉妹とかいないよね」

母は呆れたように言った。

「玲華、あんたホントに頭大丈夫かい？」

## 胸騒ぎ

とんでんしゃん。よーっ。

午後三時を少し回ったころ、玲華の携帯にお見合い相手の信之からメールが入った。

「玲華ちゃん。明日、日曜日の夜また会おうよ。今度はフレンチのちよつと雰囲気の良いレストランに連れて行くよ。」

玲華は信之と付き合うことに決めていたが、何だかまた気分がブルーになってきた。

何か波長が合わないんだよなあ。今度はちゃん付けだもんね。自信過剰っていつか、相手のペースにはまりそう。

一度撤回して付き合うことにしておいて、幾らなんでもまたやめるといつわけにはいかない。すぐに返信すると足元を見られると思い、玲華は意地悪くぎりぎりまで放っておくことにした。しかし、小一時間も経たないころ、今度は信之から電話がかかってきた。

「きつ、君。明日なんだけど。だっ、大丈夫かな……。」

確かに信之の声ではあったが、人が変わったように緊張したような電話の声だった。

「ええ。今のところ空いていますけど。」

「ああ、よかった。じゃあ、明日夜七時に、いっいや、六時に横浜駅西口の高島屋正面玄関で会おう。ふっ、フレンチのいいお店だよ。そのあとは、あの。カラオケとか、えーと。あのね……。」

「あの、どうかなさったんですか?。」

「いっ、いや。何も無い。ホントに。ともかく七時に高島屋玄関でね。」

「あら？ 六時って言い直されませんでした？」

「あつ、そうそう六時、六時」

カチャツ。プープー。

変なの……。

電話を切ってから、玲華は異様に胸騒ぎがしてきた。何故だかわからないが、午前中にファミレスで会った老人の言葉が気になって、そのあたりが胸騒ぎの原因であるように思えてきた。間違えるほど自分と似た人がいるということは気になるものだ。イカサマ占い師の言葉であっても何かしら気にかかる。

その日四時過ぎ、玲華は商店街へと向かった。あの自称占い師の老人にもう一度会って、伊東華子という女性のことを聞こうと思ったのだ。

商店街の一番奥のはずれにその老人は座っていた。テーブルにクロスを掛けてその端にはロウソクを灯し、布製のカバーで覆ったお決まりの街頭占い師スタイルだ。玲華は早速近付いて老人の前に立った。

「ふむ。やはり来よつたな。何の占い相談じゃな？」

「すいません。占いじゃなくて、ちょっとお話聞かせてもらおうと思つて……」

「ふーむ。おまえはどつちじゃ。華子か、玲華か。」

「はあ？」

「だから、どつちじゃ」

「私、玲華ですが、その華子さんのことでちょっと……」

「いかん、いかん！」

「まだ何も言つてませんが」

「どこに居るか聞きたいんじゃないわ。いかん、いかん、それは言えん」

凶星だ！ でもそのくらい占い師じゃなくなっただって想像がつくわね。 ようし、誘導尋問だ！

「いえ、場所は実は知ってます。 ある人に聞きました。 その角の酒屋の二階に住んでること……」

「何い？ 酒屋の二階だと？ 誰に聞いたか知らんがデタラメじゃ。 華子はマンションに住んどるからの。 全然デタラメじゃ」

「ああ、ごめんなさい。 間違えた。 交番の先のマンションだったわね」

「違う違う。 まるつきり逆じゃ。 スーパーの向かいのひばりシティコープ？ じゃ。 まったくええ加減なことを言うやつもおるのう」

「ああ、そうだった。 ひばりコープ？ だった。 その人、間違っただったよ。 私の記憶違い。 その最上階だったわね」

「なんじゃ、惜しいけどそこが違うんじゃない。 まったくわかりもせんで知ったふりをする人間が多くて困るのう。 六階なんじゃよね。 それ」

「そうねえ、惜しかったかもね」

「惜しくても占いと同じで、はずれははずれじゃ」

「そうね。 はずれね」

「ははは」

「ははは」

ほつ。 このおじいさん。 ちょっとボケが入ってて良かった。 おかげで場所聞けちゃった。



## 尾行

午後五時前、玲華は伊東華子という名の女性のいるらしいマンション、ひばりシティコープ？の前に来ていた。オートロックマンションで鍵がないと正面玄関を通過することができない。玲華はマンションの住人を装い中から人が出てくる際に鍵をしまふりをして入れ違いに中に入った。六階へ上がり一戸ずつ表札を確認する。すると一戸だけ表札の出ていないドアがあった。玲華は老人の言うことが正しければおそらくその部屋が伊東華子の部屋に違いないと思った。

そんなに大きなマンションでもないのに、六階ですつと待っていると途端に怪しまれるだろう。玲華は勇気を出してドアのチャイムを押すことにした。その後の展開までは全く考えてもいなかったが、そうせずにはいられなかったのだ。

指が押釦に触れる寸前に玲華は玄関の内側に人がいるような靴音を聞き、あわてて手を引っ込めた。そして、背を向けて隣のドアの方へ待避した。

ガチャ。

扉が開いた。玲華の背中では誰かが部屋を出る音がした。そしてその後続いて扉が閉まる音がした。一瞬でも自分のうしろ姿は見られないに違いない。玲華は俯いたまま髪の毛で顔を隠しながら横目で出てきた人の方を見た。

「……………」

相手も横顔だったが、玲華は呆然とした。化粧は玲華よりも派手だし、服装もボディフィットの着の見えそうな超ミニスカートと派手であったが、その顔はいつも鏡や写真の中に見る自分と瓜二つのものであった。

驚いた……。これは絶対に双子だ。他人の空似なんてものじゃ

ない。自分よりやや痩せていること以外、まったく同じだ！ お母さんの方こそ呆けちゃったか、それとも嘘ついてるかのどっちかだ。私には双子の姉妹がいたんだ！

相手も自分の顔を見れば他人とは絶対に思わないだろう。双子ではなかったとしても、少なくとも姉妹を確信するはずだ。玲華はそう思った。エレベータは廊下の端に見えるが華子を乗せて降りていった。華子というおそらく玲華と双子の女性は何か酷く急いでいる様子だった。

あれっ？ あの華子さん。たしか玄関の鍵掛けてないんじゃない？

玄関は閉まっているが、鍵を掛けたような音はしなかったし、急いでいる様子からして、脇に背を向けて立っていた玲華に気を取られて鍵を掛け忘れた可能性は考えられなくもない。

案の定鍵は掛かっていなかった。玲華も慌てて飛び出し鍵を掛けることは結構ある。不思議に必ず途中で思い出して鍵を掛けるのだ。双子ならやることも似ているかもしれない。玲華の場合、あとから鍵を掛けに来て家の中までは点検しない。同じだとすれば、中に入ってしまったえばこっちのものだ。あとは同居者に気を付けることだけだ。

いえ、もし仮に同居者がいて見つかってしまっても、これだけ顔が似ていればその場を繕うことくらいはできなくもない。住居不法侵入は、犯罪行為だと思いつつも血の繋がった姉妹だ、という安心感が玲華を大胆にさせた。

部屋に入ってみて玲華は一層驚いた。

もともと部屋の造りは玲華のマンションと似ているが、中の調度品や置物に至るまでかなり玲華と似かよっていたのだ。

双子って、こんなところまで似てくるのかなあ。

同居者はいなかった。親がいるわけがない。双子なら母親は同一だ。母は玲華のところにいる。

日めくりを使っていることも同じだった。鳥を飼っていることまで同じだった。タンスの中にもしまわれた服装はやはり玲華のものより派手目のものが多かったが、下着はオーソドックスで、色もフレッシュピンク（明るい肌色）が多く玲華のものに似ていた。しかし、玲華は華子の性格で、自分と決定的に違うところに気が付いた。ほとんど家の中にあるもの全てに消耗品以外は、『華子』と名前が書いてあることだ。下着はもちろん全てに名前が書いてあった。台所の皿や茶碗の裏にも『華子』、電球にも『華子』、トイレのふたにも『華子』、鳥の羽にまで『華子』。

やっだー！ 華子さんっていったいどういう性格？ 私、こんな趣味ないよう。やめて欲しいなあ。私と同じ顔しているんだから、それにあの服装。あれじゃあまるで男求めて歩いてるみたい。おんなじ顔してやめてよね。

カチャッ。

そのとき玄関で音がした。そーっと行ってみると鍵が閉まっている。気が付いて閉めに来たのだ。玲華と同じだ。玲華は、そのあと華子を尾行することにした。

そうか、私、鍵持っていないんだ。鍵掛けないで出るしかない。華子さん。ごめんなさい。折角閉めにきてまた開けちゃう。ちょっとの間許してね。

玲華は華子を見失わないよう慎重かつ大胆に尾行した。華子の行った先は偶然にも昨日お見合いで登志子と信之と三人で話をしたホテルだった。

そこで華子は紳士的な男と待ち合わせをしていた。その男はフロ

ントで手続きののち、ホテルのキーカードを受け取った。華子は男に連れ添ってエレベーターの方へ歩いていった。

二人で部屋に入るつもりだ。今日はここへ泊まるのかな。何のため？

玲華はそこから先、動きが取れなくなって仕方なくロビーの端のベンチに腰掛けた。何やら体がだるい。そういえば今日、玲華は夕方から結構な距離を歩いていたし、緊張の連続だった。急に眠気が襲ってきて玲華はそのままベンチに横になって眠りについていた。

## 夢の中の部屋

玲華の目は夢の中にあつた。

ホテルの広い一室。先ほどフロントで手続きをして華子と一緒に歩いていた男が部屋の中にいる。ダブルベッドには華子が腰掛けている。

男は背広の胸ポケットから茶封筒を出し、華子にそれを渡した。封はされていない。華子は封筒を開け中から一万円札を半分ほど出して数えている。玲華の夢の中の目もそれを数えた。ぴったり十万円。続いて男はもう一つ少し厚みのある白い封筒を出し、華子に渡した。華子は同じように封筒を開け、今度は中身を全部出した。ワイプロ打ちされた紙が一枚。それに一万円札。今度の封筒には五十万円が入っていた。紙は良く見ると借用証と書いてある。華子はテーブルへ移つてその借用証の一番最後の行に今日の日付を書き込みサインをしているようだ。

住所は東京都目黒区……。名前は、田所安子。

ええっ？ 住所、全然違うじゃん。それに名前も偽名だ。伊東華子じゃない。

そのあと男は浴室へ入っていった。少ししてから、華子が室内で服を脱ぎヘアキャップをして浴室の脇に備えてあるガラス張りのシャワー室へ入った。玲華の夢の中の目も華子と一緒に浴室へ入った。男が湯を溜めた大きな湯船に寝そべっている。ジェットバスで泡が物凄い勢いで噴射されている。男はシャワーを浴びる華子の姿を食い入るように見ている。

何だか、男の前で恥ずかしい。自分が見られてるみたいに錯覚するよう。

玲華が夢の中の目を伏せていると、いつのまにか華子は男と一緒に湯船の中にいる。それから……。

部屋の照明がおとされ、薄暗くなった。ベッドライトだけが仄かな明かりを壁に向けていた。

暫くして部屋が突然明るくなった。華子はバスローブを身に纏って足を組み、ホテルの眼下の夜景を見ている。

男が浴室から出てきて、部屋に脱ぎ捨ててあった服を着始めた。部屋の時計は夜九時少し前になっていた。男はネクタイも締め、ホテルに来たときと同じ格好になりドアの方へ向かった。華子はバスローブのまま同じくドアの方へ向かう。

二人は玲華の夢の中の目が見ている目の前で唇を重ねた。

げっ！ やめてよ。私、こんな夢嫌だ。まるで私が欲求不満みたいじゃないのよ！

何故か玲華は自分が夢を見ていることを自覚している。不思議な状況だった。

華子に見送られて男はホテルの一室を出ていった。

## 富岡接近

男が部屋を出ていったところで玲華の夢は終わり、彼女は目を覚ました。しかし、今度は現実の中でロビーにいる玲華の目の前をその男が通過していった。玲華は思わず俯いて顔を隠した。男はフロントに向かい、一言、声を掛けるとフロント係は丁寧にお辞儀をした。華子をおいて一人で泊まらずに先に帰るのだろう。もう一度男は玲華の前を通過するので、再び玲華は俯いて髪で顔を隠した。

今日は、いったい何回顔を隠しただろう。もう尾行なんて金輪際やめとこう。

今日、華子の方はおそらく一人でホテルに泊まるのだろう。しかし玲華は、折角ここまで来たのだから、相手の男の名前くらいは確認していいこうと思いつrontに向かった。顔は華子と同じである。華子よりやや地味目だが、華子になりすまして聞き出してやろうと……。

「あの。すみません。今の男性の連れの者ですが……。あの、あの、ああ名前ド忘れしちゃった。えーと……」

「ああ、富岡様ですね。今お帰りになりましたが、何か……」と言った。

「いえ、やっぱりいいです」

「あの、奥様は本日ご宿泊でよろしかったですよね」

「えっ？ あ、はい。それでよろしかったございますのよ。はい」

「……………」

もう、ロビーには長居できない。玲華は、今日そのままマンションへ帰るしかなかった。明日、夜にでも華子のマンションへ行け

ば会って話ができるかもしれない。しかし、マンションでは表札も出していないくらいだから、チャームで呼んでも居留守を使われるような気がした。それに、明晩はお見合い相手の信之との待ち合わせもある。

玲華は、明日朝、またこのホテルに来て、華子のチェックアウトを待つのが確実であり、そうしようと考えた。



## 誤認

翌日、玲華は華子の宿泊しているホテルへ朝六時に到着した。そんなにも早くから華子を待つというのは、玲華の心の中に血の繋がった姉妹に対する特別な想いがあったからだ。小学四年から母一人子一人の生活を送ってきた玲華にとって、目の前に突然現れた家族はどうしても見失ったり離れたりすることのできない存在となっていた。

それと、もう一つ、玲華には気にかかることがあった。お見合いのときに信之が話していた彼が担当する殺人事件に関連していることだ。彼は、殺人犯の女のことを、

『犯人はもとは女詐欺師だね。色仕掛けで男を釣って金を借りてはドロロン、ていうやつだね。今回は金を借りた男を駅のホームから突きとばして転落させて殺しやがったんだよね』と言っていた。

また、こうも言っていた。

『あつ、そうそう。その詐欺師の殺人女。あなたと同じ三十歳なんだよね。詐欺容疑で手配されてたから手配写真があるはずだけど、男に大金出させる殺人女の顔するのはどんな顔してるんだろっね。うははは』

それと、玲華が夕べ見た夢。ホテルの一室での華子と富岡という男とのシーン。玲華にはとても夢とは思えないほどリアルなものだった。

まさか、華子が信之の言う指名手配の犯人であるなどとは考えたくないし、当然考えすぎだと思われたが、どうも玲華には気になって仕方がない。血を分けた双子の姉妹だからこそ、心配して悪い方に悪い方に考えてしまうのかもしれない。

しかしさらに、玲華は信之の豹変したような昨日の電話でのやりとりを思い出して背筋がぞっとするような思いがしていた。もしも華子が指名手配犯であったなら、華子と同じ顔をした玲華に対して

手配写真を見て態度を豹変させるのも無理はない。もしかして今日、横浜での待ち合わせで信之が玲華を捕える……。そんな状況まで、玲華の想像は発展しかけていたのだ。

その後の展開は、玲華の危惧していた想像が現実のものになるものだった。

玲華は、念のため華子がまだチェックアウトしていないことを確認するため、フロント係に話し掛けた。

「あの、あの富岡の……」

「あ、チェックアウトでございますね。少々お待ち下さい」

「あの、いえ、あの」

「宿泊料金は昨日先に富岡様から頂いて済んでおりますので。追加料金もございません。どうかなさいましたか？」

やっぱりまだ華子はホテルの中だ。チェックアウトしていない。

するとフロント奥の方から支配人風の男が今対応したフロント係を呼んだ。玲華が覗き込んで見ると、支配人風の男はうしろを向きながら何やらフロント係に耳打ちをしている。

玲華はわざと大きめの声でフロント係に話しかけた。

「あのう。今朝は何時までお部屋にいてよろしかったでしたっけ？」  
フロント係は急に引きつったような顔をして、

「昨日申しましたように、十二時までごゆっくりなさって頂いて結構です」と言った。

フロント係は明らかに青ざめている。耳打ちされてから明らかに様子がおかしい。

再度奥の方を覗くと支配人風の男はどこかへ電話をかけている。

手には写真のようなものを持っていてそれが小刻みに震えている。

玲華は『ピン』ときた。警察への通報だ。あの写真は容疑者の手配写真だ。警察が当たりを付けてフロントに渡しておいたに違いない。

玲華は、フロント係のあの狼狽ぶりが手配写真は華子の顔写真であることを証明しているような気がした。もはや疑う余地すらなくなってきた。玲華は華子と同じ顔だ。

私が捕まる！

玲華は咄嗟に向き直ってわざとゆっくりエントランスの方へ歩きだした。

私は手配中の伊東華子じゃない。彼女はホテルの中にいる。私は逃げる必要などない。でも、私は逃げようとしている。

正面から信之を含む三人の男性が歩いてきた。玲華はもはや捕まえるしかない……。

「伊東華子だな？」と一人の男。

「違います。松玲華といます」

「演技はいいよ。もう」と信之が口を挟んだ。

玲華はあっけなく連行された。

## 回想……

県警本部の取調室に入り、玲華は何枚もの写真を撮られた。

彼女は昨日ほとんど寝ていないと言って取り調べをもう少し待ってもらおうようお願いした。昨夜は数時間マンションのベッドで横になってはいたが、色々なことが頭を巡り、満足に寝ていないことは事実であった。とりあえず、玲華は拘置室での眠りを許された。

そこで、玲華はまた、夢を見た。

それは、自分が幼い、物心付いたころから今の自分までの急速早送りのような回想であった。

小学四年生のときに母が離婚、父に母子ともに捨てられた。それから母は、女手一つで玲華を育てあげ、玲華を大学まで入れてくれた。玲華がさらに大学院へ進み二年目になった矢先に母が脳出血で倒れた。玲華は、大学院の中退を余儀なくされたが、運良く一流会社の総務部長に気に入られ、その会社の秘書室に勤務することになった。

## 二つ目の夢

玲華は一度、そこで目を覚ました。

どうして私がこんなことに……。そうだ！ きちんと説明すればわかってもらえるはずだ。私には、現に双子の姉妹がいるのだから。

少し安心すると、途端に玲華は二度目の眠りに就いた。

また同じ夢が始まった。小学四年生のときに母が離婚、父に捨てられた母と子。

しかし、夢の中で玲華の持っていたノートには、松玲華ではなく、伊東華子と書いてあった。

そのあたりから夢の内容が急に変わっていった。高校を中退する。そしてバイト先で六歳年上の太った男の人に会う。華子は家を出てその太った人のもとへ転がり込んだ。その人とは将来の結婚を約束する。華子はその人のことを『太つちよ』と呼んでいる。二人と愛猫『みー』の生活は、貧しいけれども心満たされるものだった。

「華子。俺は画家になる夢をもっているんだ。風刺絵というか、まあ漫画をぎゅつと一枚の絵に詰め込んだようなやつさ。あとね、ミュージックバンドも組んでみたいと思ってるんだ」

「太つちよ。味噌汁は合せ味噌よりも赤出しがいいわよねえ」

「俺は合せ味噌派なんだけどなあ……。あとねえ、俺は小説も書いてるから、本も出版したいな」

「太つちよ。みーが最近食欲ないの。トロまぐるしか食べない」

「それって食欲ないのかなあ。あのね、華子。おまえ俺の話聞いてくれる？」

「聞いてるわよ。私、明日からまた働くよ。バイト先決まったんだ。太つちよの夢が細くならないよう、私も働かなきゃね！」

そこへ夢の中へ突然現れる兵頭という男。兵頭はギャンブラーで競馬で大穴を的中させ金だけはたらふく持っている。早速華子はその兵頭という男にたかり始める。返すあてもつもりもない金を、偽名で借用証を書き借りる。そのお金を、さも真面目に働いて稼いできたようなふりをして愛する太つちよへ渡す。

「華子。ダメだよ贅沢しちゃ。お金は将来の結婚や子供の為にちゃんと貯めておかないと……」が太つちよのいつもの口癖だった。

華子は借金を返さないまま、兵頭の前から姿を消す。

兵頭は騙されたことに気付き、探偵社をつかって華子をついに見つけ出す。そして、金を返せと華子に強く迫る。そしてついには殴る蹴るの暴力だ。

「おまえの旦那に伝える！ 貸した金を返さないとおまえを監禁するとな」

華子は隙をみて兵頭から逃げ出す。

そしてある日華子は、兵頭が一人で駅のホームの最も線路側に立っているところを偶然に目にする。そして……。兵頭はホームに入ってくる電車にはねられ死亡する。華子は逃げる。逃げる。そして逃げ切る。

ああ。私、とうとう、人を殺しちゃったあ。

その後、華子は太つちよの所へ帰り、殺人の事実を告白する。太つちよは二人で外国へ逃げようと言う。しかしそれには金がない。

そこへ現れる富岡という男。昨日夢に出てきたホテルだ。富岡からお小遣い十万円を貰う。そしてまた、華子は返すあてもつもりもない五十万円の借用証を書いて富岡へ渡す。

昨日の夢と繋がったところで、玲華は目を覚ました。

玲華には、わけがわからない。いえ、理解はできるが、何故そんな二つの夢を見たのかわからなかった。

他人じゃない！

拘置室には玲華の他に誰もいなかった。ちょうど目が覚めたころ、警察官が入室してきて「来なさい」と言った。

別室では刑事と叔母の登志子が並んでいた。玲華は急に悲しくなつて思わず大声で泣き出した。

「私、何もしてないの。でも、でも、捕まっちゃったの。もうみんなと会えない。わーっ」

登志子は玲華のもとへ駆け寄つてきて彼女を抱きしめた。

「ううん。玲華ちゃん。もう大丈夫よ。大丈夫なのよ」

「ええっ？」

「大丈夫。説明したのよ。あなたは手配中の容疑者の人と違つつて大変だつたけど」

登志子の隣にいた刑事らしい男の一人が簡単に説明をした。

伊東華子には戸籍がない。玲華の戸籍は確認できるし、高校卒業以降、容疑者と一致しない点が多く、それが確認されたので、別人ということになったという。

別人？ そう。でも他人じゃない。双子なのよ。双子の姉妹。

でも、もういいかあ。そんなこと……。

玲華が華子とは別人とわかり、あわてて警察はホテルへ華子の所在を確認しに行ったが、とき既に遅く、部屋はもぬけの殻だったという。

ところが、玲華が涙を拭いている間に、新たな情報が入ってきた。

「伊東華子の目撃情報がありました」

一人の刑事が報告しているのが聞こえた。

「どこだ」

「丸丸グランドホテルです」

「昨日の斜め向かいのホテルだな」

「昨日と同じく、富岡氏と一緒にようです。フロントには、富岡氏は先に今晚十時頃華子を残して一人帰る、と言っているそうです。」

宿泊代金も富岡氏が先にチェックイン時に支払いを済ませています」

「そうか、昨日とまったく同じパターンだな」

「では行きましょう」

「いや待て。昨日と同じなら富岡氏が出て容疑者が一人になってから踏み込もう。政府要人である富岡氏を巻き込みたくない。万一マスコミに知れたりすると面倒な圧力がかかってきて、俺らの仕事がいよいよやりにくくなる。へたすると、苦労して捕まえた容疑者を釈放してすべてなかったことにしろ、なんて話にもなりかねない」

ほとんど会話の内容は玲華に筒抜けである。

「あの、私、もう帰っていいですか？」

「ああ、どうぞ。このたびは申し訳ございませんでした」

玲華は県警本部の正門を出たあと、すぐに登志子と別々になった。登志子と一緒にお茶でも飲んでいこう、と玲華を誘ったが、玲華は用事がある、と言って別れた。そのあと、玲華はタクシーで丸丸グランドホテルへと向かった。

玲華には華子のいるホテルの部屋が、誰にも聞いていないのに何故か頭に浮ぶ。それに玲華は華子の生い立ちの夢を見た。もし内容が間違っていないければ互いに心が通じていることになるのだ。

血の繋がっていない他人であるはずがない。おそらく一卵性双生児だ、と玲華は思った。双子は双子でも、一卵性の場合にはテレパシーのような何かを通じ合うことがあるとも言われる。玲華はそんな話を聞いたことがあった。

彼女を助けなくては。私の双子の華子を……。

警察は既に現地の丸丸グランドホテル付近で張り込んでいて、富



岡氏が夜ホテルを出て、華子の部屋へ踏み込むための待機をしていた。

## ヤマンバルック

玲華は変装しないとまた同じことになると思った。同じ顔だから、ホテルの中をうろろろしているとまた誤認逮捕されてしまう。彼女は、通りに面した化粧品店を見つけ、そこでちょっと車を待たせ、化粧品を買い込んだ。

玲華は、変装よろしくタクシーの中で思いつ切りおかしな化粧を始めた。今はほとんど見ることもなくなった、いわゆるヤマンバギヤルのお化粧だ。こげ茶色の顔に真っ青のアイシャドウ、真っ白のアイラインに真っ白の唇。今は絶滅したヤマンバルック。髪の毛は思いつき逆毛をたてて雄ライオンにした。

「そのアパートの前で、また一旦停めてちょうだい！」

「はい。は。あれ？……」

バックミラーで玲華のヤマンバルックを見た運転手は思わず急ブレーキを踏んだ。

「ひいひい！」

玲華の夢の中の華子の人生が少なくとも一つは当たっていることがこの段階で証明された。夢に出てきた『太つちよ』のアパートが夢の通りその場所に存在したのだ。玲華は太つちよがいるはずのアパートの部屋の戸口を叩いた。

「はい」まさに夢のままの『太つちよ』が出てきた。

「ぎゃあ！ オバタリアン！」

「オッ、オバタリアン？」

「……………」

「……………」あのね。オバタリアンじゃなくてね。これ、ヤマンバギヤルね。ギヤル。ここ間違えると怪我するから」

「……………」

「私、華子のお友達。玲華って名前。華子が今ピンチなのよ。ホテルにいて警察に捕まりそうなの」

「何だとう?!」

「説明は後で。とにかく一緒に来て!」

「わからないけど……。わかった」

玲華は太つちよをタクシーに乗せ、華子のいる丸丸グランドホテルへ向かった。

丸丸グランドホテルはやはり高級シティホテルだった。そのロビ―を頭ぼさぼさ、服よれよれの太つちよとヤマンバギヤルならぬヤマンバ年増女が腕を組んで歩く。

「ひいひい!」

「げーっ」

明日の国際会議に出席するため各国から集まった要人は二人の姿を見てうるたえ、ロビ―は一時騒然とした。

刑事の信之が、「おい、何が起こったんだ。騒々しいぞ」といつきながら言う。

「あれじゃあ、皆うるたえますよ」

若い刑事が二人を指差した。

「なんだありゃあ。よりによって一番大事なときに変な邪魔が入ったな。あのイカレカップル。金を渡して早くつまみ出してこい!」

若い刑事が五千円札を財布から出して、二人のところへ走って行った。

「これあげるからね。外へ行つてね。もう中へは入らないでね」

「ええっ? それくれるんですか?」と太つちよ。

「あんた何言ってるのよ。そんなもの要りません! 私たちはこの泊り客よ」

「うそでしょ。このホテルは最低でも一泊ツインで五万円はするぞ。よし、じゃあ、これでは……」

刑事は千円札をもつ三枚加えた。

「ダメです。いくら頂いてもダメなものはダメです」

「十万円くらい貰えたら取りあえず飛行機乗ってあいつと外国へ行

けるんだけどなあ」と太つちよ。

玲華は太つちよの背中をつねって口に指をあてた。  
若い刑事は諦めてしょんぼりと信之の方へ戻っていった。

「一〇二五の富岡さんの部屋へ連絡取りたいのですが」  
フロント係は露骨に嫌そうな顔をした。

「お客様、富岡様とどのような関係でしょうか。富岡様は今ホテルに着かれたばかりで、おそらくくつろいでいらっしやいます。もう少しあとになさってはいかがかと……」

「あんた何さまのつもり？ 何、人に指示してるのよ。私は急いでるの！」

フロントで例のカップルが何やらもめている光景を遠目に見た刑事は、離れたところから、「もめずに、好きなようにさせておけ」というようにフロントにジェスチャーした。その後、フロント係が小走りに刑事の方へ来て、「あの、富岡様の部屋へ電話をしていますけど、いいんですか？」と言った。

「何い？」刑事の一人は若い刑事に向かっていらつきながら言った。「あいつら、とことん邪魔しやがるぜ。まったく……。おい。あのおかしな二人に即座に電話を切らせる。逆らったら公務執行妨害で即、連行しろ。それから非常口の連中に連絡して、女がそつちから逃亡するかもしれないからしっかり塞ぐように伝える。もう待てない。緊急発進だ。これから富岡氏が出るのを待たずに部屋へ一気に踏み込むことにする！」

玲華は内線電話を呼び続けた。そして遂に部屋の誰かが受話器を取った。しかし、返事がない。おそらく電話口にいるのは富岡ではない。彼はお忍びで女と密会しているのだから簡単に出るわけがない。

玲華はひそひそ声で、しかしはつきりと言葉を發した。

「華子さん！ 逃げて！ 早く。警察が大勢いるの」

玲華の脇に若い刑事が来て怒鳴った。

「警察だ。おい！　すぐに電話を切れ！」

「あらひょつとして刑事さん？　やったあ。テレビで見るより何かずっとカッコ悪いよねー」

「何い！　おまえ。何と言った。侮辱罪で、た、た、た、逮捕する！」

「あのね。私、富岡さんの愛人よん。華子ちゃんも愛人仲間よん。彼女に電話代わってって言ったたら、もうとっくにずっと先のKKプリンスホテルの三六階に移ったつてさ。ああめんどくさ」

若い刑事の脇には既に刑事の信之が来ていた。

「なっ何だと？　KKプリンスホテルの三六階だと？」

「もう、声でかすぎ！　それとも三七階だったかなあ」

「おい。KKプリンスホテルだ。全員即座に移動しろ」

「はあ？」

「はあ、じゃない！　全速力だ！　ホシに逃げられるぞ！」

そしてロビーには警察関係者は誰も居なくなつた。

「ボーイさん。また、一〇二五かけてくれますかあ」

「ぼっ、ボーイ?!」

今度は女性の声が返ってきた。華子だ。

「あなた、誰？」と華子。

「あなたとおなじ顔の人よ。早く逃げ去つて言ってるでしょ。何してるの?」

「私、もう逃げないわ」

華子が電話口に出たことを知った太つちよは玲華の持っていた受

話器を横取りした。

「おい、華子。俺だ太つちよだ」

「あなた……」

「高飛びしよう。どこまででも俺はおまえと一緒にだ」

「私もそう思っていたわ。でも、もうそれはできないの」

「何を言っているんだ。何故なんだ」

「もうダメなの。玲華さんが私の人生の続きなの」

「何だかよく意味がわからないよ」

「占いのおじいさんが言ってた。私、今までお金欲しさに悪いことばかりしてた。とうとう人まで殺しちゃった。だから、私の醜い不幸な人生はリセットさせるんだって。私のいままでの人生はなかったことにして、人生ちよっと前、そう、私がまだ悪いことをする前の高校二年生ころの時代にさかのぼるんだって。そこから玲華って人が代わって今度は悪いこともしない幸せな人生を送ることになるんだって」

「はあ？ 何わけのわからないことを言ってるんだ。そんな馬鹿げた話、いったい誰に吹き込まれた。ああ、その占いのじじいか。うさくさいやつめ。おまえはそいつに騙されてるんだゾ！」

「誰が、うさくさいじじいだ！」

そこにはかつて玲華のことを華子と呼び、人のことを太っただのお尻が大きいだのと失礼なことばかり平気で言ったじじい、いえ、自称占い師の老人がいた。

「おい、じじい！ おまえは俺の華子に妙なことを吹き込んで、いったい何をするつもりだ」

「だからね。もう華子の人生は必要がないのじゃよ。わからんかね。おまえら頭弱いのが」

「くそ、もうこんな頭のいかれたじじいに構っている暇はない！」

## いじろの叫び

「電話じゃ、らちがあかない。上がるう」

「うん」

太つちよと玲華はエレベータで十階上がった。

ドアをたたたく。返事がない。仕舞いに太つちよはドアを激しく蹴飛ばし始めた。

補助鍵の金属パイプが付いたまま二十センチほどドアが開いた。

「警察をよぶぞ」富岡の声だ。

「あんだ富岡つて人ね。ここにいて一番都合が悪いのはあなたじゃなくって？」

「脅迫するつもりか」

「ええそうよ。華子さんを引き渡しなさい」

「そんな人間はいない」

「うそ、いま電話で話したところよ」

「いないといたらいない。それより、その後ろのデブは何者だ」

「俺は華子の恋人だ。許婚だ。いいから早くここを開ける。そうしないと富岡氏がここにいるって大騒ぎするぞ。下のロビーには顔の知れた外国のお偉いさんがウヨウヨいて、新聞記者も山ほどいたぜ」

富岡はドアを開けた。奥のベットに横たわる女性の姿が二人の目に一目散に飛び込んだ。

叫ぶ太つちよ。

「華子！」

そこには一見して信じがたい華子の姿があった。

その姿はまるでパステル色の絵の具で描かれた肖像画のように薄く、その輪郭も今まさに消えかけているように見える。

今を生きている人間の姿には到底見えない。

太つちよは華子に駆け寄った。体は透き通っていて太つちよの手の平は虚しくベットの上についた。

「華子！ 華子！ 華子　　！」  
玲華はあつげにとられたように口を開き、声も出ない。  
その時富岡は上着を取ると逃げるように部屋を出て行った。

「ほらね。もともと人生永すぎたわけじゃよ。君の華子なんて、もともとこの世にいなかったわけじゃね」

先ほどの自称占い師の老人がいつの間にか部屋の入り口のところにいた。

我に返ったように、太つちよが老人の方へ向き直った。その目は激しく血走っている。

ある時点へ戻って分岐された人生。それは、不幸を背負ったまま終わらせないという、誰かのお情けなのか。

太つちよは目を力いっぱい閉じ、歯を食いしばった。そして喉の奥から声を搾り出した。

「人生のハッピーエンドだとう？ そんなことを望んでいない人間だっているんだ。人それぞれ、その人なりの人生なんだ。リセットだ？ そんなことをする権利は神にだつてない！ あるはずがない！ あつてはいけないんだ！

華子はなあ。必死に人を愛し続けてとうとう悪事に手を染めてしまったんだ。そんな華子の人生なんか、煙みたいに消えてなくなつてもいいとでも言うのか！ おまえは！ ええ？」

自称占い師の老人はじつとだまって聴いていた。何も言わない。その目は少し大きく見開かれている。

「このやろう！ 何とか言いやがれ。このうすらじじい！」  
太つちよは老人に掴みかかろうとして、その体をすりぬけ思いつきりドアに頭を打ち付けることになった。

「あつ、あなた大丈夫？」



太つちよが頭をかかえながら振り向くと、そこには華子が立っていた。いや、太つちよの見間違えだ。華子ではない。ヤマンバルツクの玲華だ。すでに濃い化粧も半ば落ちかけてところどころに華子の顔が見え隠れする。

太つちよはベッドの方を見た。既に華子の姿は消えてしまっていて見えない。

「華子　　！」

太つちよは絶叫した。

「だから頭大丈夫？」と玲華。いや、華子。どつちだ！　ともかく今、部屋には太つちよ以外は一人の女性しかない。

「華子？　か？　おまえ、華子か？」

「そうよ。どうしたのよ。頭打っておかしくなった？」

「玲華はどこへいった」

「誰よそれ。まさかまたあんた、他にヘンな女作ったわけ？　いい加減にしないと怒るよ」

太つちよは涙を流しながら笑いだした。

華子はちよつと残念そうな表情を見せながら言った。

「あつ、そうか、私だつてあなたに内緒でスケベなおじさんと会ってたもんね。とうとうバレちゃったね。でも、それは、すべて太つちよと私のため。本当だよ。まさか、太つちよがここまで来るとは思ってたなかったよう」

「おまえ、その化粧何とかしろ」

華子は部屋の入り口に備え付けられた鏡を見た。

「やだあ。何この化粧。酷い。誰のいたずら？」

「ははは」もう一度太つちよは泣き笑いをした。

## お色直し

「そこまでだ！」

入り口には刑事の信之と数人の男がいた。

何かにすぎるように顔をゆがめて華子の顔を見る太つちよ。

「伊東華子だな」

「はい」

「殺人容疑の被疑者として身柄を獲捕、署まで連行する」

「はい」

太つちよの方に顔を向けて寂しそうに口を開く華子。

「太つちよ。一緒に高飛びして逃げるなんてできなかつたね。できるはずないもんね。ごめんね太つちよ」

太つちよは笑った。そして泣いた。

「いい。いい。俺の華子。華子がいればいい」

「私も太つちよがいればいい。他に何も要らないよ」

華子は、信之ともう一人の刑事に両脇を抱えられるようにして連れられ、部屋を出た。

「華子！」

立ち停まり振り向く華子。二人の刑事も一緒に足を停める。

「なあに？」

「待ってるぞ」

「太つちよもヘンな女に引つ掛かからないでね」

「馬鹿たれ！ おまえの決めた人生だから。俺もそれに付いていくぞ」

「そのセリフおかしいよ。普通女が付いていくものでしょ」

「どつちだつていい」

華子は投げキッスしようとして、腕が刑事から離れないので、おかしなタコみみたいな口になった。

それを見て太つちよは腹をかかえて笑った。

一人の刑事が華子の歩行を促すように腕を引いた。

信之は、それを見て「言いたいこと、言わせてやれよ」というように首を横に振った。

「華子……」

「なあに？」もう一度華子は呟くように言う。

「今日は俺とおまえの結婚式だ」

「ええ？ 今、何て言ったの？」

「今日が俺とおまえの結婚式……」

「本当？ わかった。じゃあ、私、お色直しに行ってくるね！」

「よし！ 綺麗になって俺のところへ戻ってこい」

華子の目にも涙が潤んでいた。

丸丸グランドホテルの大きなエントランスの外。

華子は十数年ぶりの再会となる母の待つ警察署へ向けて、警察車両に乗り込んだ。

『了』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4693s/>

---

『結婚』

2011年4月15日11時10分発行